

大村はま国語科単元学習実践の研究

— 昭和20年代初期の実践を中心に —

山 元 悦 子

(1999年9月10日 受理)

1. 考察の目的

わが国の戦後国語教育の歩みの中で、戦後新教育の理想として紹介された「単元学習」という概念を巡る諸論議の展開は、国語教育のあり方に関しての考究を促した。また、単元学習実践の誕生は、戦後の国語教育実践に一つの道を開いたものとなっている。

本稿で取り上げる実践家大村はまは、戦後の新制中学校における国語科単元学習実践の開拓者である。当時の単元学習論は、教育思想としてのみ提示され、具体的な方法については、アメリカのコースオブスタディ等の紹介によって示されたにすぎなかった。大村はまは、その単元学習論を、具体的な実践のあり方として世に示してきた人物である。論者はこれまでに、注1に記した論文によって大村はま実践に関する考察を行ってきた。本論文は、その一環として、特に大村はまが昭和20年代初期に接収した単元学習論の内容を明らかにする事を目的としている。そして、それが大村の当時の実践と共鳴し、その後の実践の核となっていったことを論じたい。

2. 新制中学校の国語教育について、大村はまが抱いていた根本的な考え

大村はまは、昭和13年から勤めていた東京府立第八高等女学校から、昭和22年5月1日、深川第一中学校に転じていった。

そのときの思いを、大村は、敗戦直後のこれまでしてきたことすべてが否定された虚無感の中、「もうこれから後は奉仕の生活で、どんな苦勞をしてもいいから、新しい日本が生まれるために身を捨てて何かしたい」という献身的な覚悟で、中学校へ出る決心をしたと述べている。(『私が歩いた道』筑摩書房 1998 182ページ)

そして、新制中学校ができたこと、つまり、義務教育が3年間延びたことを次のように理解し、話し合いの指導に力を入れた国語指導のあり方を求めていったのである。

<中学校ができ、義務教育が3年伸びたわけですね。それをいろんなふうに受け止めた人があるでしょうけれども、私は戦争に負けたことから本当に立ち上がるための3年間だと受け止めていました。新しい勉強を通じて、そのために日本が民主国家として再生するために3年間任されたものと受け取っていました。それを国語科として受け止めてみますと、何が足りないかと言って、話しことばであると思ったわけです。それ以前も話しことばの指導がなかったわけではありません。一人話はずいぶんありましたし、演説みたいな話しもありました。けれども話しことばの中でも、話し合いってことができないんです。それが不十分だったのだ。そのためにこの3年間はあるんだというふうに受け止めました。> (『第28回 大村はま国語教室の会研究発表大会』1998年11月23日の講演「私の単元学習から」より)

3. 深川第一中学校の状況と実践「やさしいことばで」

戦後の六・三・三・四新学制制度は、昭和22年4月より発足する。大村はまが、昭和22年5月2日から勤務し始めた新制中学校、深川第一中学校は、大被災地の中にあり、授業をする場所は、隣の深川工業高校の講堂であった。そこは、屋根や鉄の窓枠はあったが床はないような状態で、二組合同の100人近い子どもを集めて授業をするというありまさであった。

隣には鉄釘を作る工場があり、その騒音で一斉授業などできる状態ではなく、個人学習やグループ学習をせざるを得ない状況だったという。また、子ども達の実態は、ひらがなの書けない生徒をはじめとする大変な学力差があり、とうてい一緒に教えることはできず、個人の学力に応じた指導にならざるを得ない状態だったのである。

また、赴任当初は、まだ文部省教科書は発行されておらず、新聞の切り抜きを人数分用意して課題として与えるというような授業を行っていたという。²⁾

当時の実践記録として残っている「やさしいことばで」を用いた実践を元に、大村はまの新制中学校における実践の出発点の実態を見てみたい。

「やさしいことばで」は、文部省『中等国語巻二(1)』(昭和22年9月8日発行)に収録された教材である。

大村はまは、『どう教えどう学ぶか』(ことばを育てる會 昭和22年9月25日発行)において、この教材について、具体的でないため、例えばどういうことを指しているのかが生徒にわかりにくいと述べている。そこで、具体例を生徒の身近な生活の中から拾い、(例えば鉛筆の広告文)それに問題をつけて課題として取り組ませるという学習を行っている。(問題例ーやさしい言葉を使うことに反対する人へ手紙文で違うことを説明する。)

この実践はおおよそ次のような指導過程で行われている。(実践の詳細は『大村はま国語教室』第1巻 7ページから35ページを参照されたい。なお、この実践の記録は、昭和23年6月から7月にかけてのものである。)

1. やさしい言葉での教材文の一部を5分間で書く。(書写)
2. 教材文「やさしいことばで」を読んで感想文を書く。
3. 学習目標を立て、学習計画を立てる。
4. 国語手引きの問題(19項目)について各自が学習する。
5. 個人で学習した内容の発表や、それをめぐる話し合いをする。
6. 学習を通しての態度や聞き方話し方書き方読み方作文について自己評価表に◎○△をつける。

この実践の特徴は、次のように指摘できよう。

- (1) 劣悪な学習環境のため、個人学習やグループ学習を中心にせざるを得なかったこと。
- (2) 抽象的な文章を生徒の身近な問題として考えさせるために鉛筆の広告などの資料を使ったことが、生徒の言語生活から教科内容を導き出す、生活経験重視の学習につながっていったこと。
- (3) 話し合いや発表の場のある、言語活動を重視した学習であったこと。

大村は、劣悪な学習環境と甚だしい学力差のある生徒達を相手に、なんとかして学習らしい学習を成立させる事を目指す中で、国語学習のあり方に関して後の大村実践の土台を形成する指導方法をつかんでいったのである。

4. 「中学校教員再教育指導者養成協議会東京大会」への参加

このような試行錯誤の実践をする中、大村はまは、「中学校教員再教育指導者養成協議会東京大会」に東京地区代表者として選ばれ、参加する機会を得た。

この「中学校教員再教育指導者養成協議会」(昭和23年5月27・28・29日 於東京第二師範学校女子部附属)は、中学校教員再教育のための各種の講習会・研究会の指導的立場に立つ人材を養成するために開かれたものである。この東京大会には、関東地区の指導者が各地区から派遣され、受講していた。この協議会は、東京大会を皮切りに、広島、宮崎、愛媛、京都、愛知、岩手で開催されていった。大村はまが記録したノートによると、協議会の講義の担当者として森田中等教育課長、オズボンの名前が記されている。

大村はまは、この協議会の内容を、様々な機会に伝達する義務もあり、新制中学校教育の理念や具体的な国語の学習指導法について、まさに、わらをもすがる思いで受講し、その内容を吸収しようとしたのである。

この会の講義内容を筆記した大村はまのノートは、大村はまが接収した単元学習論の内容を知ることができ、日本の新制中学校における国語教育に伝達された単元学習論の原点を示す貴重な記録である。以下にその概要を示したい。(ノートはそのままの形を尊重し、欠落部分や不整合な部分もそのまま記載した。○は読みとれない文字を示している。(略)は引用者による省略を示す。³⁾

ノート1 (項目のみ示す)

＜新制中学校教育の原理 中等教育課長 森田氏

新制中学校教育課程の編成について オズボン

国語科の目標

- 1 ことばの学習とは何か (略)
- 2 ことばの学習指導とは何か (略)
- 3 ことばの学習指導の目標 (略)
- 4 国語科の範囲と目標との関連 (略) >

ノート2

＜国語科における単元構成の原則

一単元的方法の理論的根拠

(1) 生徒は成長しつつある

これは平凡なことであるが、今まで考えられなかった。自明のものと思っていた。生徒があるものを持ち成長しつつあることを忘れていた。言語教育、ことばの問題では特にそうである。例えば読む力でも、自分で好きで、家では間に読んで付けていく力の方が多いのである。それをはっきり認めて、その上に国語教(ママ)

(2) 教材それ自身は、いかなる形をしているか、印刷した本であると思っている。しかし教材は受け取る人があって初めて生きているものである。受け取る土地がなければ無いのと同じである。例えてみれば、ここに四才の子がある。学習指導要領国語科編を読んでいると四つの子どもが来て、自分の本のようにしてしまった。この子どもにとっては学習指導要領は何の意味もないものである。教材はこのように受け取る人があって初めて生きるものである。教科書は生徒の経験

(3) 成長しつつある経験が教材を作り出す

いったいわれわれの経験は、絶えず成長している。教材は成長の媒介、手段、契機になるものである。そうやって初めて教材である。(例えば今自分がこのようなところへ手をつき込んで話している。この態度を見てみなさんはおかしいと思い、自分自身が話す場合には決してポケットに手を入れない。そうすると、みなさんにとってこれは一つの教材である。そして一つの進歩の契機となっている。)動いている経験は、自ら教材を作り出すものである。中学校にはないが、小学校の低学年には文字版が出ている。文字を知るときに役に立つ。作業にも役立つ。文字板の方法は、エクスピューリアンチャートといい、チャート学習といわれる。生徒が入学してきた。引率して構内をまわる。教室へかえった時、何を見たか、門のそばには何があったか、という如き問いを出す。その考えを聞いて適当なよい表現を教師が書く。

このような時、経験したこと自体が、教科書になっていくのである。

一生徒は成長しつつある

二教材は生徒によって生かされねばならぬ

三成長しつつある経験が教材を作り出す

この思想をもっともっと強めていきたいものである

(4) 教材観と生徒観との二元的対立は捨てられねばならない。

与えられた教材に対する教材観を立て、別に生徒を観察して生徒観を立て、両方の一致したところに指導観が成り立つ。が新しい見方では、教材は生徒の経験の中に生かされてはじめて教材となるのであるから教材観、生徒観、指導観が一つである。生徒そのものの動的な経験として捉えた時、一つになる。ここに単元学習の理論的根拠がある。

二 国語科と単元的方法

単元的方法は、従来の一章一課と違い、生徒が興味を持っている一つの話題に、学習を重点的に結集していく学習の方法。この時の単元という意は、作業単元である。作業単元とは、学習作業のひとまとまりである。あるいは学習活動の組織という意味である。単元的方法は、生徒の学習活動を、重大な興味をもととして組織していく方法である。学習活動そのものから出発していくのである。従来の教科書の体系は論理主義だった。課とか章とかは注入主義。生徒の方から出発していない。

単元学習は生徒自身の興味と必要から出発する。やり方には、今までに比し、抽象的でなく、具体的であり、体系的でなく、生活的である。これが新しい方法として理科や社会科に取り入れられている。

三 単元選定の方法

単元的方法は、結局生徒の生活経験そのものに立っているから、個人個人によって違う。だからそれぞれに違った単元を考えていかねばならぬ。ただ現在では、不可能である。現に単元はかえてよりどころがなく、やれなくなる。どうしても基準を示してほしいという方が多い。

現段階で 今のままで取れる方法として次の三つをあげる。

(イ) 教師と生徒とが、学習指導要領の範囲内で共同製作する。

(ロ) 教科書を活用して、教師と生徒とで考えてゆく。

(ハ) 教科書をもとにして、他に教師と生徒とで共同作成して補う。

イは自由にやれるから具体性に富む。社会の要求に応ずるように均衡を考えて工夫する。(ロ)は具体性から来ている。教科書に〇〇のものであるから、特殊な生徒にはあわぬが学習活動のバランスにかけては〇〇である。興味から一応〇〇から、それに興味を与えたり動機化したり、いろいろの工夫がいる。(〇〇ばかりやったり討議ばかりになったりしない。)

(ハ)現在の日本ではこれがいい。教科書を芯にして、そのまわりに学習活動を組織し結集していく。その時に必要な自発的な学習活動の結集である単元を補っていく。

四単元選定の条件

①単元は生徒が興味を持つ話題でそれを中心に学習活動を結集し、生徒めいめいの発達を〇〇うもの。興味には、一時的のものも〇〇的のものもある。興味といっても興味それ自身指導されねばならぬ。

②社会の必要から、ある興味を持つように指導することがあらねばならぬ。社会的必要というのは、大人ではない。(大人であると今までの教育と同じになってしまう)大人になって必要ということあまり考える必要はない。社会的必要というのは、現在子供の立場から、子供としての社会的必要を考えていけばいいのである。現在の必要に主意がある。

③能力にあうこと

あってなければだめ。いくら興味を持っている話題でも、あまりむずかしすぎてはだめである。

④学習のバランス(均衡)

あることのみに偏してはいけない。話し合いばかりであったりしてはいけない。

⑤学習の連続

前の単元、これから後の単元との連関

今までの教科書も以上のようなものであるべきだった。考えないわけではないが、こういうことを考慮しつつ、論理的、体系的ということと考えている。

五単元構成のしかた(単元の作り方)

単元(学習活動の組織)によって価値ある学習と有効な〇がなされねばならぬ。

次のことを考えて作る

①必要の確かめ 単元学習が意義あり、価値あることを説明する。

②目標の指示 その単元を通して成し遂げられるもの、考えられることを列挙する。

③単元の概観 この学習に入ってくるいろいろの仕事を大観する。

④資料の蒐集 先生と生徒が〇にしうる材料を集める。

⑤動機化 動機を与える。生徒たちをこの単元の学習に導き入れ、興味を持たせる方法を考察する。

⑥作業の段階(狭い意味の学習活動)

(イ)話し合いなどによって、生徒の興味や態度知識をあらかじめみておく。

(ロ)質問を書き出したり生徒がなにをなすべきかの表を作ったりする。

(先生も生徒も)

(ハ)参考書の書き抜きや調査研究をする。

(ニ)集められたいろいろな考え方をまとめてみる。そして正しい解決の得られた問

題にしるしを付ける。

(ホ) 全体の学習をまとめる。

七評価（リバリエーション） 教師がする

二つの点に注意しつつ

①言葉に起こった成長と変化

②個人個人の好き好き ○○ 注意すべき問題

以上は単元一般の作り方である。しかし国語においても使える。

教科書の一課一課にこの方法を生かしていくにはどうしたらいいか。

二十八日

国語科における単元構成の実際

昨日の要約

教科書を作るのは先生自身である。極論かもしれないが、教科書を生かすのは、先生自身である。今、たまたまこれが出ているが、ない場合、自由に編纂される場合を考えてみれば、それは当然そうである。教科書はどこに生かされるのか。生徒の心の中に生かされるのである。そして、生徒の日々の実体として実を結ぶのである。従って私も国語教師として、国語学の結果を教え込むのが目的ではない。目的は生徒の持っている国語の力を伸ばすのである。生徒がいろいろの言語生活を持っている。それをより有効的にしていく。そのためにというのが本当のいい言葉が知らねばならないから国語学の本を読み、文学も読むが、それが目的ではない。そのように考えてくると、単元の作り方、作っていく実際の時ははっきりする。

単元構成の実際

一、中学校生徒の言語生活の場面

学習指導要領 97ページ

この19の項目は特に順序はないのである。ただ思い出すままに書いた。

(12) 本を買いたい。野球の道具を買いたいという程度のもの

この中には、日本の中学生のやっていないこともある。(18) などあまりやってない。またこれで網羅しているわけではない。もっと付け加えてほしい。また、この考えによって自分の生徒の言語生活の実際をもっともっと知ってほしい。そしてそれをより効果のあるようにするのが目的である。特にはなす生活については指導要領の103頁。その(3)は、お祭りでも何でもよいのである。(12) 演劇も話し方の中に入れる。

これからの国語教育は、生徒が実際に言葉を使っている（高級な本を読むのもこの中にある）（新しい国語教育はあまり実用的な高等な文化的なことを○しない）そういう具体的な場面で国語力が養われてくる。

於 氷川小学校

一新しい国語教育の指導原理

学習指導要領国語科編編集の基本になっている三つの考え方

- (1) ことばの見かたにおける機能の重視
- (2) ことばの学習における興味の重視
- (3) ことばの指導における個人差の重視 以下一々具体的に実例をあげる

(1) について

実際に働くことばを教える。働く場で教えることである。それはこのごろのいわゆる基本語的方法である。この方法は日本でも相当に行われているが、アメリカでもイギリスでももう定説になっていることである。

たくさんのことばはあっても社会生活において文化生活において本当に重要なことばは少しいである。一番出てくる十語を探したとすれば世界共通である。その基本になっていることばから教えてゆくべきである。基本になっていることばから教えてゆくべきである。基本になっていることばは、その出てくる度数すなわち頻度数の多いことと、またあちらにもこちらにも出ている即ち範囲の広いことによって知られるのである。ことばでなく、言い方の方も同じである。調べてみると平生の生活にぜひ必要な言い方は、そうたくさんはないのである。この働くことば、働く言い方から教えるのである。これは世界の国語教育の定説である。

次にその働くことば、言い方を生活の場で教えてゆくことである。ことばをことばとして教えるのではない。たとえば手紙指導でも、本当にそのとき必要な手紙を書き、帰りにそれをポストに入れてくるのでなくては本当の指導にはならない。

(2) について

興味のないうところに学習は始まらない。学習指導要領に一番出てくることばは興味ということばで、二百何回かあるとのことである。

(3) 個人差について

すべての子供を一つの高さにまでつれていこうとしないでよい。めいめい一人一人をめいめい一段ずつ上げればよいのである。指導は生徒の成長の手助けなのである。でなければ個人個人を伸ばしてゆくことはできない。個人個人を教育しない教育というものはない。

以上をよく考えると学習は単元学習でなくてはならないことがわかる。以上を今日の話の伏線とする。

単元とは、ある興味ある話題を中心に、学習活動を結集して組織すること、その学習のひとまとまりである。

二新しい国語教育における教材と教師と生徒

まず教材中心主義を打破しなければならぬ。教材を用意するものは教師である。教科書のみを中心に行っていくことは根本から改められなければならない。

文字版 p47 チャート学習 チャート(図表)

教師と生徒とが教材を作ってゆく方法、即ちアメリカのチャート(図表)学習(掛図学習)である。生徒の経験そのものを教科書とするのである。先生と生徒で教科書を生み出していくのである。

学校新聞は、これと同じ思想のものである。文字版に根本において一致するものである。

三国語科と単元的方法

(1) 単元的方法とは何か

単元は学習のひとかたまりということである。子どもの興味を持っている問題を中心にして、そこに学習の活動を結集し、組織してゆくことである。アメリカの実際（ストリックランド。インディアナ大学助教授）

○いかにして作業単元を完成するか 1946刊

作業単元は重大な興味・話題・問題について、その子ども達の学習を組織することによって、教材と技術の発達とを結びつけようとする学校側の努力を示す。

○進んだ教科書は、第一単元 第二単元というふうになっている。課や章とは反対のいき方である。課や章にはその背後に〇〇があり、論文主義がある。単元的方法是これに対して具体的生活的である。

ここではっきり言うが、国語教授は、国語学や国文学の財産を伝えるものではない。国語教育は日常生活に必要ないろいろの使用法を与えられればいいのである。学問を授けるものではない。

(2) 国語科における単元的方法の困難

困難はどこにあるか

(イ) 本質的理由

国語教育では、練習を要する。普段の練習がいる。国語は知識ではなく、技術であるから、これをいかにわかったとしても反復練習しなければならないものである。それで、その学習は重点的でなく、継続的にする方がいいからである。

(ロ) ことばの学習は非常に日常的である。始終しているものであり、継続的に絶えず学習しているのであるから、一つ的话题に結集する必要がない。単元を〇めても、単元以外にも学習の機会はいくらもある。文法などは単元学習の最もよくやれる部門である。(辞書を引くときにも活用の知識がなければならぬ。)が読書の指導、作文の指導にはなかなかできにくい。それで課章的な方が力がつくような感じがするのである。

(3) 国語科における単元的方法の導入

単元的方法を導入することによって、国語学習の効果が前よりもあがる。どういふ点であろうか。

○読み方、書き方、話し方、作文などが総合的に扱えるということ。

○国語科というものが孤立せず、生活の中の一つとして学習されていく。

単元的方法では、国語科が孤立せず、他の教科と関連していくことが多い。国語科の内容は、他の教科に属する。国語科としての純粋性が問われてくるという考えもそこに出てくるわけである。

○教科書は一冊で読み方話し方聞き方書き方すべての教科書なのである。単元的に扱ってこそ生きるのである。

(4) 単元計画

(イ) 単元計画の基礎(どのようにして単元を建ててゆくか、その基本)

「生徒の言語生活の実態を知る」ことである。今まで、実際先生の頭にあったものは、まず教材観児童観そしてその上に指導観が成り立っていた。これからは、このむしろ影にあった生徒観が主になり、生徒の実態から出発せねばならないのであ

る。子どもの言語生活の実際、興味の実際を知ることが大切である。

興味の実際を知る方法

作文 親しく交わる 教室での感想 面接

(ロ) 単元選定の方法について

(a) 子どもの興味

興味それ自身も指導することが大切である。興味と必要、興味と能力という問題が大切である。また必要を生じさせれば、興味を持つものである。必要には、社会的必要と子どもの生活としての必要がある。この社会的必要と言うことを間違えると、今までの指導と同じになる。新しい意味の社会的必要に、大人の必要ということではない。5才の子どもに、今にピアノがいるようになるからとピアノを買っておくようなそんな必要ではない。子どもの現在の社会生活を十分に営ませれば、先へ行ってそのときの社会生活を営む能力に出てくるものである。

(b) 必要

(c) 能力

(d) 学習のバランス 偏らぬこと(劇なら劇ばかりというふうにならぬこと)

(ハ) どんなふう to 作っていくか

理想はその受け持ちの子どもが、その場で作っていくことである。しかし、それは今のところ用意が足りなくなる。今の具体的方法としては、次の3つがある。

(1) 教師と子どもとが、学習指導要領の範囲内で共同作成してゆく。

(2) 教科書の活用として、単元的方法を取り入れてゆく。

(3) 一部分に教科書を活用し、他に先生と子どもとで場面作成してゆく。

教科書にでてこないものを補う。

この(3)が最もよいと思う。

(二) 単元選定の実際

アメリカにおける単元的教科書の実際

「アメリカにおけるジュニアハイスクールの教育」 富永 国民教育社

(ホ) 単元構成

単元計画 一年生 六年生 九年生 十二年生の単元計画があていい。その上で一部の単元を立てる。

(a) 単元構成の原理

十分考えて構成され、最後に必ず評価がなされねばならぬ。

組み立ててゆく上の注意

一. 必要の確かめ(選んだ単元がどういう意味があるか、説明する。)

二. 目標の指示

具体的に列挙する。この単元学習をして、これだけやらせたら、またこういうことができるはずだということを書く。生徒にも書かせる。

三. 概観

見渡す。この学習に入ってくるなすべき、いろいろの仕事経験を全部見通す。

四. 資料の蒐集

自習活動を奨励するような材料

五. 動機化

六. 学習活動

作業段階

(三) を具体的に時間の順序を追って配列すること

第一次 第二次 …と作ること

七. 評価

六と七の間に、教科書によらぬ場合は単元の説明がある。「入学」というような単元の場合

単元学習と効果判定

効果判定と評価は同意。ただ一般的に言えば評価であり、単元に即していえば効果判定である。これは単元学習にはぜひともなくてはならない。単元は学習のひとまとまりであるといったが、そのまとまりをつけるものは評価であるから。この評価によって教科がまとまるのである。評価は段階をつけることではない。

効果判定の目的

1. 生徒自身、どれだけ成長したか、成長を確認する。そして学習の意欲を高める。
2. 教師のため

効果判定の方法

考査はその一つの方法にしかすぎぬ。

テスト改善の必要

国語科における学習評価の方法

1. 考査
2. 個人個人の観察記録

この子どもにこういう特徴がある。この記録と一緒に成績物をとっておく。

その子どもの国語に関する歴史がでるよう面接して特徴を書いておく。

3. 評価表の作成

細かく、詳しく作ること。評価は改善を含むものでなければならない。生徒を改善し得るようなものでなければならない。

二. 経験の領域と興味を持つ話題

1 学校のこと 2 家族の中の出来事 場でもあり話題でもある 3 社会 4 自然
季節 5 行事 考査 運動会 季節の行事も含める 6 社会の偶発的事件

興味を持つ話題

右のことは皆興味を持つが、そのほかに一般的に興味を持つものは、生徒によって違うが、

航空機の発達 健康 病気の征服 科学上の発見 平和の問題

(興味は知能によって違う)

興味のある話題に学習活動を集めてそれによって力をつける。で、我々は常に生徒の興味を知っていなければならぬ。

三. 大きいひろい単元と小さいせまい単元

我々は大きなことにも興味を持つ。小さなことにも興味を持つ。単元は興味を持つ話題に学習活動を集めるのであるが、大きいことにも小さいことにも興味を持つものであるか

ら、大きい単元も小さい単元もたつわけである。もっとも広いものは、生活経験全般にわたるもの、その解決についてどの教科ということなく、あらゆる教科の目的が達せられるようなもの

「入学」

これからの学校生活について話してゆく。

先の、たとえば航空機の発達が選ばれたとすると、事物としては理科である。それを飛行機の生産など研究すれば、社会科、飛行機についてのいろいろの文献など調べ方、飛行機についての文学を調べる、自分も飛行機についての文学を作るという風にすれば国語科である。広いものを選んでどの教科とせずにやっていける。

せまいものは、国語科独自の単元のことである。もちろん生活に即してでなければならぬが、言語生活に関する興味ある問題、また興味を持たせねばならぬ問題、もっとせばめれば、読み方の単元、話し方の単元もある。たとえば、

「電話のかけかた」

読み方の単元としては、物語を読むにはどうしたらいいか、それと同時に物語をどういう風に読むか、話すか、とすれば、国語科の単元、さらにそれを劇にして演出となればひろくなる。

せまいのに、興味としてはせまく偏してくるが、しかし純粋にことばの力養成に努められる。

現在の教科というものが分かれている限りは、こういう方向に進んでもいいのではないか。生徒の興味ある問題を持っているなら生活全体からとってもいいと思う。つけ加えておくことは、昨日単元の構成の仕方を話したがそれは国語科のせまい単元の場合で、広い単元の場合はさらに説明がいる。

四. どんな単元を選ぶか

アメリカにおける経験中心の単元

一年生 1 会話 ゆうぎのあそび 2 話しかたの改善 3 友好的な手紙の書き方 4 日常の様々な冒険の話しかた 5 物語の書き方 6 国語と比べる 7 知識の調べ方 8 商業用の手紙の書き方 9 明確に説明する事 10 詩の鑑賞 11 学習した事例の復習 (〇〇文法)

二年 1 いっしょに話しあう 2 よりよき物語へのステップ 3 明確に説明する事 4 出版物の書き方 5 手紙による友情の維持 6 勉強の援助としての国語 7 よき報告の作り方 8 学級討論のしかた 9 国語のよき商業用の使い方 10 インデックスのための文法及び使用法

単元的に構成されているアメリカ教科書の題目

一年 1 物語を話す 2 めいめいの経験を話し合う 3 友達への手紙を書く 4 社会的な挨拶の観察 5 命令をしたり説明したりすること 6 定義のしかたと考えのまとめかた 7 実務上のことば 電話をかけるとか電報をみる、注文を発する 8 文章の分析 (文法と他科学の〇あるようなこと) 9 文法のまとめかた 10 論文のかきかた 11 会議の進め方

二年 (略) 三年 (略)

国語科における単元学習活動の実施について

一、指導案作成の基準

次の七つの項目を踏まねばならぬ

一必要のたしかめ 二目標の指示 三概観 四資料 五動機化 六作業段階 七評価

これだけを含めば、順序等は如何様でもよい。三項目にわけても二項目でもいい。

これだけの内容があればよい。単元の説明に選ばれた単元が他の科にもわたるときに必要。

二、教科書以外の○○な単元について

実例の一「情報のしらべ方」

書物の利用法 図書館利用法

集め方調べ方を身につけていることが大切。個々の知識のあるよりも、調べる態度が大切。

目標の指示

この勉強で我々は、何かの主題についてしてみる計画をしよう。計画する方法を考えてみる。

概観

書物の索引を利用する事 図書目録の見方 図書館の利用法 目録の調べ方 ノートの取り方 要点だけを早くとらえる

作業

次のような問題について生徒が好きな問題を選びどのようにして学ぶか考えること

- ・砂漠の植物はどのようにして生きているか
- ・○の共同作業について調べるのにどうしたらよいか

一つを選び、どのようにして調べるか、書かす。

大事な点をノートに書かす。

著者はどういう考え方をしているか。重要なところを抜く。反対の意見のあるところ書き抜き方もいろいろある。

自分の持っている本の目録を作る。分類する。

図書館へ実際に行ってみる。図書館へ行った時のことを話し合う。

図書館に対する希望を話し合い、文に書く。

次に評価をする。

・せまい単元の例

話し方の改善 朗読のしかた ○○○の広告 友への手紙の書き方 記録の取り方 新聞の作り方 日記のつけ方 読んだことのまとめ方（以下25例略）

これらをどこまで進めるかが問題である。1年間のプランを立てて、より出さねばならぬ。1年間を見通して適している（興味と必要ある）ものをやる。生徒の実態をつかんで、その上に立案する。そして教科書外のものが必要だという時に入れる。

教科書の学習の手引きは、どんな方向に進めていくかの一つの案がでているのだ。かならずあとの五つなら五つの問題をやらなくてもいい。方向は手引きのとおり。しかしやり方は変えていく。>

このノートによると、「中学校教員再教育指導者養成協議会」で示された単元的方法是、「従来の一章一課と違い、生徒が興味を持っている一つ的话题に、学習を重点的に結集していく学習の方法」「単元は学習のひとかたまりということである。子どもの興味を持っている問題を中心にしてそこに学習の活動を結集し、組織してゆくことである」と説明されている。

ここで紹介されている単元的方法とは、当時アメリカでも新しい教育方法として注目されていた「作業単元」による学習指導である。作業単元とは、『ヴァージニア州カリキュラムの方法』（1931年）によると「作業単元は、教育目的に即した主要な目的を実現するために、子ども達が従事する一連の関連する諸活動である」と定義されている。また、ジョージ・プログラム（1935年）では、「ある一つの興味や目的に中心を持つ、様々な価値ある諸経験と諸活動から成り立っている」学習活動と説明されている。

大村のノートによると、この講習会では、アメリカのジュニアハイスクールで用いられた単元的教科書の紹介がなされており、大村のノートには、単元で構成されている教科書を引き写したものも残されている。

この講習会を通して日本に紹介された作業単元学習は、そもそも教育カリキュラムを総合学習課程と分化教育課程とに二分して考えることを前提にしたものであり、そのうちの総合学習課程において行われる学習方法である。

そのため、作業単元で設定される単元のテーマは、例えばヴァージニア・プランでは、子どもの興味の中心を縦軸（シーケンス）に、社会生活の主要機能を横軸（シーケンス）にして設定される。例えば次のようなものである。

第五学年の作業単元

単元1 発明と発見は、生活、富、自然資源の保存と保護の方法をどう変えるのだろうか？

単元2 発明と発見は、商品の多様性と便利さにどう影響を及ぼすのだろうか？⁴⁾

昭和22年版学習指導要領国語科編で例示された作業単元の例「われわれの意見は、他人の意見によってどんな影響をこうむるか」も、このような作業単元を参考にしながら設定されたと考えられよう。

しかし、そもそも分化教育課程に位置付く性格を持つ「国語科」の中で、総合学習課程で行われる作業単元の内容をそのまま適応できるはずはない。協議会の講義の中に、「国語科における単元的方法の困難」という項目が早々と立てられている点に、その苦悩を伺うことができる。

では、国語科の単元学習、つまり教科の枠の中で生かされる範囲での単元的方法のあり方として、積極的に導入されたのは何であったのか。

それには、単元的方法を支える基本的な発想の導入がまずあげられる。つまり、生徒の興味を出発点にして学習内容を選定することが強調されたのである。

また、その興味を推進力として話し聞き読み書く言語活動を組織していくことが授業の方法とされたことも指摘できる。具体的に言えば、指導過程組織の方法として次のような形式が紹介されている。

1 必要の確かめ 2 目標の指示 3 概観 4 資料の収集 5 動機化 6 学習活動（作業段階） 7 評価

このような段階によって、単元（学習活動のかたまり）を構成する学習方式が取り入れられたのである。

また、作業単元のスコープとシーケンスが社会生活全般にわたるテーマ設定であるのに対し、国語科では、生徒の言語生活に絞った単元テーマを設定するように変容して受容されていることが指摘できる。それは、大村のノートの中で「広い単元とせまい単元」という項目で説明された部分である。

それによると「せまい単元」が、国語科独自の単元であり、「生活に即してでなければならぬが、言語生活に関する興味のある問題、また興味を特に持たせねばならぬ問題」について設定されるものであった。その具体例に「電話のかけ方」があげられ、読み方の単元は次のように説明されている。「物語を読むにはどうしたらいいか、それと同時に物語をどういうふうを読むか、話すかとすれば国語科の単元、さらにそれを劇にして演出となればひろくなる。」

教科の枠の存在を前提とした単元学習の方式とそのテーマの設定の仕方は、以上のようなものとして国語科に導入されたのである。

この講義の後の質問の時間に、大村はまは手を挙げて自分の実践を報告したという。それは、「どういふわけか、心の中で自分のしていることが、オズボーンさんの話されていることと、そっくりのような気がした」ためであった。

そして、その実践をオズボーンによって、「あなたがやっているのが、それが単元学習です、単元学習そのものです」と評価されたことにより、「新聞から始まって、ああやればいいか、こうやればいいか、と四苦八苦して、それが単元学習そのものであるとおっしゃっていただいて、私は、『ああそうか、よく耳にしてきた単元学習とは、わたしがやっているのがそうか』と思ったのです。そして、単元学習を飲み込んだような気がしました。」と述べている。⁵⁾

大村はまは、この協議会参加に先立って行っていた日々の授業において、劣悪な学習環境の中、教科書がないため、たまたま目にした新聞を切り抜いて、一人一人異なった教材を用意した実践を行っていた。つまり、個人個人に異なった教材を用意した実践を試みていたのである。

そして、その新聞教材に食いつくように勉強を始めた子どもをみて、子どもは、「やる仕事があって、それがやれるというとき、求めているものがあり、ちょうど自分のやれることがあって、その方法が授けられたとき」⁶⁾ 荒れまわっていた子どもが一変して目を輝かせて学習に取り組むものであることを体験を通して感じていた。

大村はまは、このような体験や、「やさしいことばで」実践で試行錯誤で行っていた方法が、協議会で学んだ単元学習という考え方に本質的に共鳴しあうところがあったこと、つまり、手探りの実践でつかんでいたことと、単元学習論との共通性を感じ取ったのである。このとき、単元学習は大村の中で、借り物でなく、実践体験を通して共感的に肌で理解することのできる考え方として、その後の実践の核心に位置付いたのである。

協議会で触れた単元学習論への共感的理解と、その後、この協議会で学んだことを実践を通して世に問わなければならない立場からの責任もあり、大村はまは、この後も、実践を通して新教育のあり方を具体的実践として世に示し続けていった。この頃の大村実践を見るために、石森延男・文部省の関係者・山口喜一郎等の人々が、大村教室を訪れたという。⁷⁾ 大村実践は、単元学習という新教育の実践モデルとして注目されていったのである。

大村はまが昭和20年代に手がけた実践研究は、次に列挙したようなものであり、書写指導・評価法・古典指導・グループ学習・古典指導・討議指導など多岐にわたっている。⁸⁾

昭和23年 第1回全日本国語教育協議会「中学校の国語科教育課程について」(11月26・

27日)

習字についての調査をし、新しい毛筆習字の指導は、生徒の興味を中心に生活化して行うことを提案。

- 昭和24年 東京都研究会 物語の鑑賞の指導「地蔵の話」
 東京都研究会 討議の指導—カードによる発言の指導—
 東京都研究会 予備テストの研究
 三k会 学習の手引き(物語・小説)—各教科書より—の検討
 文化集会 実践「実用的な手紙」報告
 第2回全日本国語教育協議会 「グループ指導の問題」
- 昭和25年 第5回東京都国語教育協議会 「国語能力評価とアッチーブメントテストについて」(7月9日)
 第3回全日本国語教育協議会 「予備調査とその活用の実際—能力別グループ学習指導の試み」
 東京都再教育講習会 「個人差に応ずる指導—クラス雑誌の編集—」
 文部省指定校発表会 「中学校における古典学習『古典に親しむ』」
 習字研究協議会 「習字の学習指導」
- 昭和27年 東京都国語教育協議会「討議の指導」
- 昭和28年 第6回全日本国語教育協議会 「長文の読解指導」
 東京都研究指定校発表会(11月12日)「文学の鑑賞指導」

これらの実践を通して大村はまが「国語科単元学習」のあり方を究明し、具体化していった過程は、稿を改めてさらに考察していきたい。

謝辞 鳴門教育大学図書館に所蔵されている大村はまのノートの閲覧に関して橋本暢夫氏に多大なご厚意をいただきました。記して感謝申し上げます。

注

- 1) 「大村はま国語科単元学習の成立の基盤—芦田恵之助実践の継承と発展—」『広島大学大学院教育学研究科博士課程論文集』第14巻, 1988。/ 「大村はま話し言葉学習指導実践の考察—昭和20年代における実践の位置と意義—」『教育学研究紀要』第36巻第2部, 1991。/ 「大村国語教育実践における単元学習概念について」『教育学研究紀要』第34巻第2部, 1989
- 2) 大村はま『私が歩いた道』筑摩書房, 1998, p189・193
- 3) 「中学校教員指導者要請協議会」東京大会の内容は、飛田隆『戦後国語教育史上』(教育出版センター, 1983)において、飛田の筆記録を元に紹介されている。大村のノートとの食い違いも多いので、事実はどうであったかを究明する必要があるが、この論文では大村はまが受け止めた講義内容はこうであったという扱いで論を進めている。
- 4) 佐藤学『米国カリキュラム改造史研究 単元学習の創造』(東京大学出版会 1990 p279・296)による。
- 5)・6) 大村はま『私が歩いた道』筑摩書房, 1998, p196・191
- 7) 大村はま「石森延男先生のみたまに」『国語教育相談室』343号 光村図書, 1987
- 8) この活動記録作成にあたっては、飛田隆『戦後国語教育史上』(教育出版センター 1983), 『大村はま国語教室』(筑摩書房 1982~1985)を参考にした。